

# 図書館通信



**ようこそ！香川短期大学附属図書館へ**  
新入生のみなさん、ご入学おめでとうございます。  
万巻（まんがん）の書を読むに  
あらざるよりは いずくんぞ  
千秋の人たるをえん

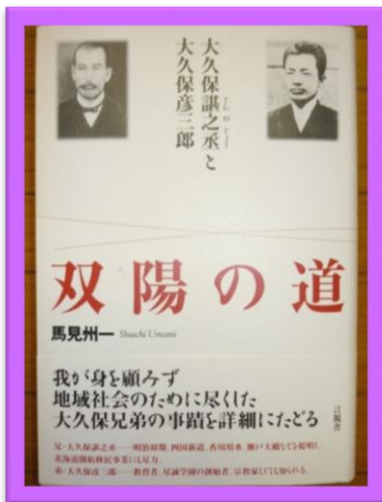


吉田松陰

(多くの書物を読み勉強しなければ、良き生き方を遺すような人間にはなれない。)

新年度、新しいスタートへの期待感と共に心引き締まる思いではないでしょうか。みなさんの勉学の補助となる資料提供はもちろんのこと、人生の支えとなる図書に多く出合えるような図書館でありたいと思います。そのためにも、図書館をどんどん活用し、図書館員に感想、要望の声をどしどしお聞かせ下さい。一緒によりよい図書館を作っていきましょう。

## 香川短期大学のルーツをたどる

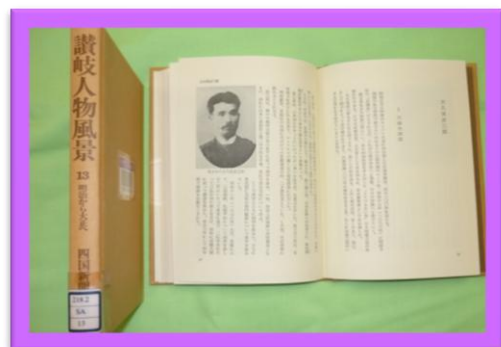


香川短期大学の学祖、大久保彦三郎先生とその実兄大久保謙之丞先生の事績をたどる図書が、2013年1月に出版されました。お二方の足跡とともに、香川短期大学の母体となる尽誠学園のあゆみが詳しく書かれています。

『双陽の道』 馬見 州一  
言視社 請求記号 289.1/UM



附属図書館内の「大久保文庫」  
建学の精神にゆかりの資料を展示



殖産・文明開化に尽くした明治の讃岐人  
15名の間像を克明に紹介。  
P.96～P.109 大久保彦三郎先生

『讃岐人物風景 11』  
四国新聞社 請求記号 218.2/SA/11

## 読書の楽しみ



子ども学科第 I 部  
日野 明世 先生

職業柄、本を読むことは私にとって大事な仕事のひとつですが、読書が大好きなのは幸いです。読書は、自分が直接体験できないことを本の中で体験させてくれ、新しい知識を得られる刺激に満ちています。読書が好きになった始まりは、幼児期です。その頃は、まだ終戦から 10 年も経っておらず、衣食住も十分ではなかったのですが、本を買うことはぜいたくのひとつでした。多くの家庭と同様、私の家も豊かではなかったのですが、それでも、4 人きょうだいが一につきひと月に 1 冊だけ絵本や雑誌を買ってもらっていました。記憶にあるのは、2 歳上の姉が幼稚園から毎月持ち帰る「チャイルドブック」という雑誌です。今考えれば、ストーリーのある内容はほんの一部で、大しておもしろくなかったはずなのですが、ひらがなを覚えたての子どもが読める本が家の中にほとんどない中で、子ども向けに書かれた色刷りの雑誌は十分に魅力的でした。新聞の活字の中からひらがなを拾って読むことさえうれしかったのですから、全部ひらがなで書かれた絵本は、まるで自分ひとりのために書かれた宝物のようでした。5 歳になった私は、保育園で「チャイルドブック」を毎月買ってもらうようになりましたが、その頃の姉の購読雑誌は小学館の「小学 2 年生」。そちらも難しいところを飛ばして読みました。私が 1 年生になった時には、姉が「小学 3 年生」を購読。私には「小学 1 年生」では物足りず、講談社の「たのしい 2 年生」を定期購読することにしました。情報源が新聞からラジオしかない、田舎の小さな町に住む子どもにとって、絵本や雑誌は貴重な情報源でもあり、想像の世界を広げてくれる大切な友だちでした。

足が不自由な母が読書を趣味にしている、公民館から回覧文庫として大人向けの様々な本 30 冊を毎月借りてきて家に置いていたのは、私の読書の幅を広げました。中学に入って間もなく、その巡回文庫の中からたまたま興味を持って読んだ、遺伝に関する本に、どのような行為をすれば子どもができるかをさらっと書いてあったのは衝撃でした。「皇太子（現天皇）も美智子妃（現皇后）とそんなことするのかあ…」が、真っ先に考えたことでした。次に「父と母も…？」それまでは、「結婚したら一緒にお風呂に入るんよ」「わっ、いやらしい！」「そのせいで赤ちゃんができるんやって」「ふーん…」と、子ども同士で話し合ったりしていたのですから。あれから半世紀が経ちましたが、相変わらず本を読むことは大きな楽しみのひとつになっています。

多くの情報源から様々な情報があふれ、読書をしなくても情報が手に入る今の時代が、どんな幸せを私たちにもたらしているのか、ふと考えることがあります。電子ブックが普及していく時代ですが、私には紙媒体に書かれた本を手にしたときのわくわく感は特別で、当分縁が切れそうにありません。

## お薦めの1冊

生活文化学科  
中俣 保志 先生

『街場の現代思想』  
内田 樹 文春文庫  
請求記号 914.6/UC



本を読む習慣のないひとに、薦めることができるかどうか、推薦文や推薦図書を読んでもらえるかどうか、これは非常に難しい課題だが、せっくなのでこの難問に挑戦してみよう。

「本」を表す「書」という文字は、専門家によれば、「呪文を境界に埋めて域内を衛るもの」を意味するらしい。いわば、本とは、本来「隠された祈り」を意味していた。

だから、ここでいう「本」とはそのようなものをさす。推薦する図書では、教育というものが単に消費されえないものであるということや、今の社会で起こっている就職難の問題の本質が何なのか、あるいは構造主義とは、というようなことから、バレンタインのチョコレートがもらえないのはなぜかというようなことまでを、あたかも学生の質問に真摯に答えるようなゼミの一コマのように、著者が応えてくれる。

著者もまた大学で長らく教鞭をとり、学生とのやり取りを経て、その卒業までを、「隠された祈り」で何人も見送ってきたことだろう。このような著者の姿勢は、本の執筆にあたって反映されており、編集者や時に学生との応答をその後編集しなおして文章化されたものが多数ある。推薦者である私や著者の「隠された祈り」を感じてもらえれば幸いである。

その「祈り」とは、「Sauve qui peut (生き延びられるものは生き延びよ)」とでもしておこう。マニュアルのない時代での皆さんの健闘に向けられている。

### 編集後記

讃岐富士が桃色に染まる春。「こんな場所に美しい花を咲かせる木があったんだ。」と、見慣れた通勤路の景色から、毎年喜びをもらっています。山の中で人知れず、この季節のために準備をし、限られた期間誇らしげに、煙るような花を咲かせる姿には感動を覚えます。人生で花開く時は人それぞれですが、そのための準備期間に図書は大きな役割を果たすと思います。美しい花を咲かせる支えとなる図書館でありたいと、気持ちを新たに作る季節です。

今号に寄稿してくださった、日野明世先生、中俣保志先生、ありがとうございました。また、イラストを提供してくださった、経営情報科ビジュアル・メディアデザインの太空夕華さん、岡本紗矢子さん、ご協力ありがとうございました。

イラスト：経営情報科ビジュアル・メディアデザイン 太空夕華さん

